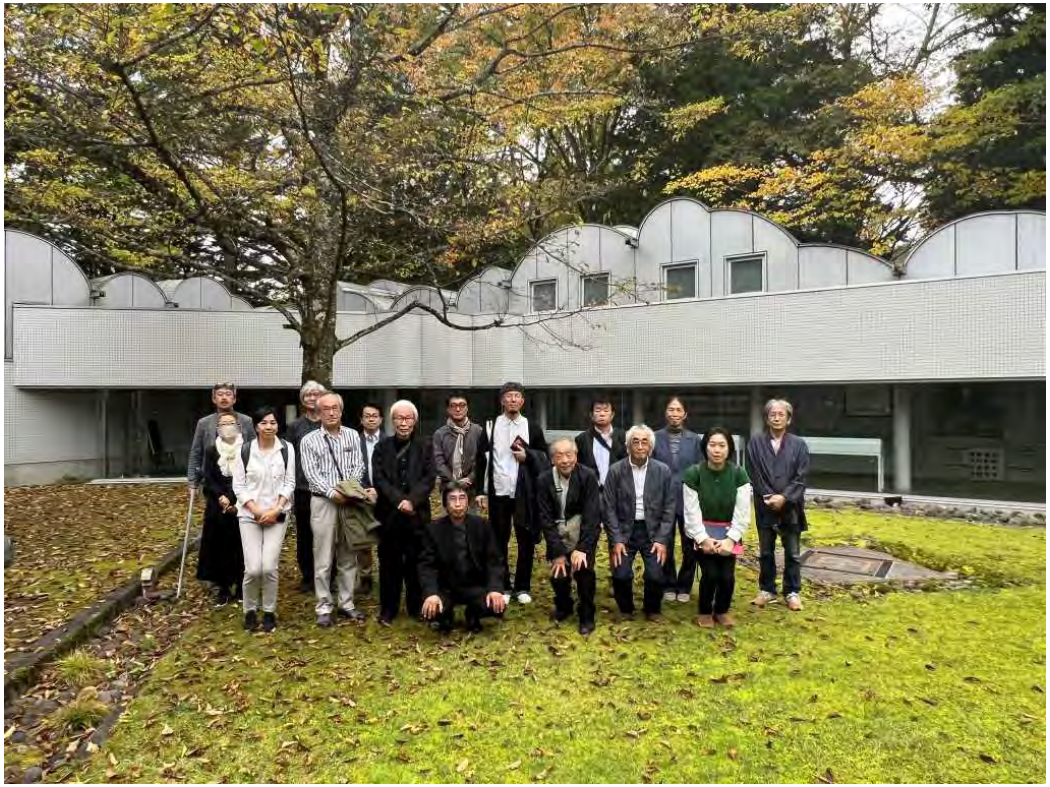
JIA関東甲信越支部 保存問題委員会

令和6年度

長野勉強会・報告書



■　保存問題委員会・長野勉強会の概要 1

○　勉強会趣旨

・令和4・5年度にかけて文化庁の「近現代建造物緊急重点調査」が長野県で実施された。

・これは、我が国の近現代建造物が、その優れた意匠や高い技術などにより国際的に高い評価を受けてはいるものの文化財としての保存措置などがほとんど講じられていないことから、これらの適切な保護を図るため、緊急かつ重点的な調査が実施されたものである。

・保存問題委員会では、2次調査対象となった建造物30件のうち見学許可を得られた6件と参考建築1件について、JIA長野地域会の調査報告者による案内により見学会を実施した。
…長野勉強会 建築資料①②③⑤⑥⑦⑧参照

・調査を主導した信州大学・梅干野准教授によるレクチャーを受け、その意義や長野調査における特徴点などを学んだ。
…長野勉強会 信州大学・梅干野准教授 講義資料④参照

○　勉強会スケジュール及び見学先

・令和6年10月18日(金)～19日(土)

・18日:①もみの木の家→②土間の家→③田崎美術館→④信大・梅干野准教授レクチャー

・19日:⑤善光寺雲上殿本殿→⑥守谷邸→⑦守谷第一ビルヂング→⑧小布施修景事業(北斎館等)

■　保存問題委員会・長野勉強会の概要 2

○　勉強会参加者(合計20名)

◇ 保存問題委員会(関係者含:計14名)

・福田之一（委員長:目黒地域会）
・大西康文（副委員長:千代田地域会）
・下﨑明久（副委員長:長野地域会）
・井口哲一（委員:新潟地域会）
・大嶽陽徳（委員:栃木地域会）
・黒田和司（委員:神奈川地域会）
・田村克己（委員:杉並地域会）
・長井淳一（委員:群馬地域会）
・本澤幸一（委員:茨城地域会）
・太田安則（Obs:千代田地域会）
・小谷野栄治（OB:茨城地域会）

・黒田委員奥様
・小池志津子（長井委員関係者）
・陳　雲蓮（長井委員関係者）

◇ 長野地域会（計5名）

・池森　梢（長野地域会）
・勝山敏雄（長野地域会）
・清水国寿（長野地域会）
・長島三夫（長野地域会）
・西澤広智（長野地域会）

◇ 講師:信州大学・梅干野成央准教授

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料①

①　もみの木の家　（軽井沢町:1966年･昭和41年）

◇ 設計者:アントニン･レーモンド

◇ 建築の特徴

・レーモンドの特徴がよく出ている建物(簡素を旨とする軽井沢別荘建築の一つの規範)
・全体を南下がりの地形に合わせ環境への配慮をし、平屋で主屋は切妻の建物
・各部屋からの視線が中心のもみの木に集まるように、20度づつ三つに折り曲げ、扇形に設計されている
・各部屋(主屋)から北側に厨房使用人室、浴室、玄関棟の3つの空間は切妻屋根、入母屋、玄関は寄棟となって主屋に連なっている
・唐松の磨き丸太を用い構造を表した内部空間は、レーモンドの建築の特徴(簡素にして素材をそのまま仕上材にする)

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料②-1

②　土間の家（御代田町:1963年･昭和38年）

◇ 設計者:篠原一男

土間の家　(1963)　　House with an Earthen Floor

■　「土間の家」は、軽井沢に隣接する御代田町の別荘地「普賢山落」内にあり東京在住の前衛写真家０氏（故人）の別荘として 1963 年に建築家篠原一男の設計により建てられた。０氏は若いころ桑沢デザイン研究所で教えていて、そこで篠原と知り合い設計を依頼したようだ。０氏は後の 1976 年にも自宅「上原通りの住宅」の設計を再び篠原に依頼している
「普賢山落」は、軽井沢に避暑客が多くなり始めた 1960 年頃、少し離れたこの地にたまたま広大な土地が手当てできた ０ 氏らが中心となり主に芸術関係者に参加を呼びかけ開発したものである。一般の不動産業者による開発ではなく居住者らの手作りの別荘地であり、当初から現在まで豊かなコミュニティを維持していることが特徴である。参加者自らインフラ整備計画を立て、会則を作り総会を開き景観の維持に努め夏祭りなど現在でも行われている。50 年以上も前に現代の戸建コーポラティブ的なものを目指したとしてコミュニティ研究の対象にもなっている。参加したメンバーには、柳宗理、秋山庄太郎、武満徹、杉浦康平、邱永漢など多くの著名な文化人がいる。その別荘建築の設計は、篠原一男をはじめ清家清、平島二郎、宮脇檀、小沢明などが行い現存するものも多い。戦後の別荘建築では吉村順三の「軽井沢の山荘」(1962) が有名だが、「普賢山落」はほぼ同時期に建設されたがそれとは異なる大胆な提案の建築が多かったようだ。

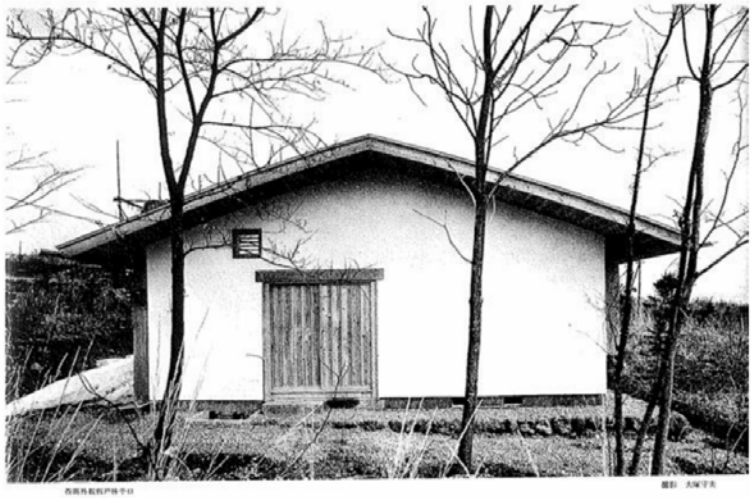
■　「土間の家」は、篠原一男の初期の代表作であり、普賢山落の最初の建築の一つである。4 間角の正方形平屋で南側に和室、北側半分に浴室・トイレ・キッチンの水廻りと土間空間と一体のダイニングがある。この構成は、篠原が活動初期に研究していた伝統的日本民家の田の字型平面と空間の分割という概念がベースにあり篠原の言う小住宅の「極限的空間の一つの平面原型」となっている。代表作「から傘の家」「白の家」のような同時期の正方形平面の小住宅には必ず方形屋根を載せているが、この家は「大屋根の家」と同様ムクリのついた切妻屋根であり伝統的表現になっている。後に篠原が「民家はキノコである」と語っているが大地に根を張り盛り上がるキノコのイメージをムクリの切妻で表現したようにも思える。内部の壁・天井は伝統的民家の真壁の表情とはやや異なり、大壁的な白く無表情な仕上げで丸柱や登り梁、障子などの空間要素を引立てている。土間空間は、当初は本物の三和土だったようだが、過去に浸水事故があり現在は土混じりのコンクリートになっている。この土間は伝統民家とは異なり北向きであることからも農的な暮らしのためのものではなく、日本民家の土間を空間的に抽象化し純粋な芸術空間として扱っているように思われる。

土間の家　(1963)　　House with an Earthen Floor

■　篠原一男は、建築家としては異例の経歴で東京物理学校と東北大学で数学を専攻、後に建築に転向し東京工業大学で清家清に師事、同大の教授となった。篠原研は坂本一成、長谷川逸子、白澤広規等多くの優れた弟子たちを輩出している。篠原建築の特徴は、生活臭の無い無機質で抽象的純粋空間と言われている。篠原の建築様式は、大きく 4 期に分けられる。第 1 の様式（1954～69）日本建築の伝統との対応。第 2 の様式（1970～74）第 3 の様式（1975～83）第 4 の様式（1984～2006）である。伝統的なものから空間構成や幾何学形態に主題が移り最後は都市を意識した多様な形態の建築になっていった。
「土間の家」は第 1 の様式に属すもので前述の代表作「から傘の家」と「白の家」の間に設計されたが、それらの白い抽象的空間とは一線を画し、伝統的民家を強く意識した二間続きの和室と大きな土間を組合せた柔らかなイメージの優しさのある空間で、この特徴は他の篠原建築には見られない唯一無二のものである。

■〈土間の家〉　長野県北佐久郡御代田町塩野

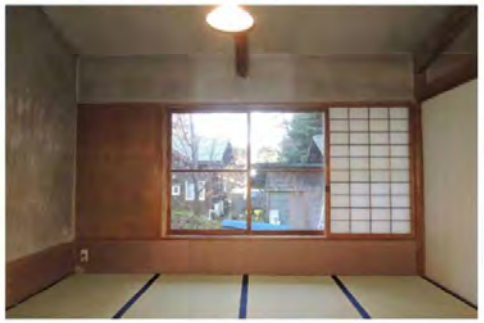
設計	篠原一男
施工	三信建設
竣工	1963 年
延床面積	53.8 ㎡



■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料②-2

土間の家　(1963)　　House with an Earthen Floor

土間の家　(1963)　　House with an Earthen Floor



■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料③-1

③ 田崎美術館（軽井沢町:1986年･昭和61年）

◇ 設計者:原広司＋アトリエ･ファイ建築研究所

新建築　1986年　8月号

親自然的な建築へ

田崎美術館

原広司

まず，軽井沢という場所についての話から始めようと思います．軽井沢は，若い人には人気があるようですが，建築の意味からすると，今はあまりメッカとはいえません．もちろん軽井沢で頑張っている建築家もいますが，むしろ自然が優越していて，現代建築であふれているという町ではないんですね．しかし，おそらくかつてのある一時期，「軽井沢」ができた頃には，新しい西洋館を初めとして，そこにはモダンな建物をつくるという進取の機運があったのではないか，と思うのです．

僕は長野県で育ちましたが，長野県は一般的に，山の中ながら非常に日本的な風景を持っているんです．しかし同じ長野県でも軽井沢はまったく特異な場所で，唯一，西洋的なムードと風景の構えがあります．風景という点では，標高が1,000mで平らで，しかもそこに人が住んでいる，というだけでも他にそうは見られないものですが，カラマツの林や並木の持つ垂直性に特徴があります．複雑に曲がって絡み合っている日本的な樹木のイメージに対して，針のように立っているのです．そして空気が抜群に澄んでいる．それからもちろん，別荘地であるということも独特の景観をつくり出しています．

この美術館には，亡くなった田崎廣助画伯の絵が展示されています．田崎画伯は，軽井沢に住んでおられましたが，住民とアトリエは吉村順三先生が設計された傑作です．画伯は文化勲章を初め諸外国から数多くの栄誉をうけられた画家で，主に自然，特に山を描いたことで知られてます．私の単純な理解は，自然の探究者としての田崎廣助というところにあります．もう一方の理解は，画伯は日本の伝統と西洋の絵画の歴史との融合をはかった画家であったということです．ですから，ひとつに自然解釈，もうひとつには伝統の解釈がもし建築にあらわれれば，広い意味での同時代人として，絵画とその背景としての建築とは，ある面で符号するにちがいないと考えて計画をすすめました．そこで，ここでは主として自然と伝統に対してどのような具体的な建築的表現をとったかをお話しいたと思います．美術館には鑑賞者という存在があります．絵の性格からしても軽井沢という場所からしましても，訪問者にすがすがしい体験を味わっていただけるようにするのが，設計者の務めです．それが画伯を記念する意味につながると考えました．と同時に，絵の背景としての建物も短い滞留時間なのですが，楽しんでもらえるような建物にすべきだと思いました．それと共に，一度訪れた人びとがもう来ないというのではなく，お茶でも飲みに立ち寄ってもらえるような軽い気分の美術館，開かれた感じの美術館であり得るような平面計画を考えました．

美術館には，一般的な美術館と，この建物のように特定の人の作品を展示すればよいという２種類の美術館があります．今回の場合は，田崎廣助さんの作品だけの美術館で，すでに亡くなったわけですから作品が増えることはない．基本的に油絵しかなく，特別大きい絵もないという，特殊性の上に成立している美術館だといえます．そして実は，この美術館の成立には，もうひとつさらに特殊な条件があるのです．

たとえばガラスの屋根がどうして可能だったかということなんですが，この建物では，住居，喫茶室には冷暖房が入っていますが，展示室は一切空調していません．夏は涼しいので冷房はいらないし，冬はクローズして人が来ないため暖房もいらないのです．この限定された開館期間がさらに特殊な条件となっている．この開館期間のために，結露の問題がクリアできているわけです．建物の上には換気塔がふたつ立っていますが，それによって空気が常に循環していて，展示室の室温度はほぼ外気と同じです．もちろん結露した水を流す策は講じてありますが，基本的には結露させない，ということです．年間開設の美術館だったら，こういうことはできない．だから，特殊条件の上にきちに特殊条件をかさねて，微妙な自然とのバランス，もしくは同化の上にこの美術館は成り立っているといえます．

●寒冷地の建築

僕は秋田で集合住宅を建てているものですから，寒冷地ではふつうのコンクリートの建物では手も足も出ない，という感じをもって軽井沢にのぞみました．軽井沢は雪の量はたいしたことはないのですが，日本でも特に寒い場所です．実際のところ寒冷地の建築には考えられないほどの制約があります．しかし考えてみれば，カナダの建築でも北欧３国の建築でも，あんなにいろいろ変化のあるデザインをやっているんです．それに対する防備をちゃんとしておけば，これはできるんじゃないんだろうかと思い直したわけです．

結露の問題が避けられたというのは，まあ，80%から90%問題が解決しているということになります．あとは雪が溜って凍結し，建築を壊していく外力をいかにそらすか，あるいは，補助的に，ヒーターなどで融かすか，ということになりますが，その，外力を逃れる必要のあるいちばんの問題点が樋なのです．特にこの建物のようなアールのついた屋根の場合，雨樋がそのディテールの生命になります．軽井沢では，雨樋を筒でやっているとみんな破裂してしまう．だから，ここでは，樋は流しっぱなしにして囲わない，囲った部分には必ずヒーターを入れると，そういうやりかたでやっています．ヒーターはアールの屋根の谷部に全部入れてあります．センサーによって作動するヒーターのランニングコストは，たいしてかかりませんし，たとえヒーターがなかったとしても，雪が長く残ることにはなりますが，大丈夫なようなディテールにしてあります．ただ，雨は垂れ流しがいいとしても，垂れ流しの先にはつららができます．このつららは，奇妙な応力を発生させるんですね．これらのディテールに関しては，かなりの広い範囲にわたって，この地の経験が長い施工業者の人びとの知識に助けられています．小屋は木造ですが，このひと冬を過ぎてみると，きれいに通っていたはずのガラスのサッシュのラインが，こころなしか，微妙にうねっていました．これが木造でやってないと，無理な力が発生していると思われます．木造の場合は，力がかかるとそれに応じて変形をしていくのです．こういう場合，がちがちに武装するか，あるいは自然の流れに身を任せるかのどちらかではないでしょうか．ここでは，できるだけ自然に逆らわないように，と考えたわけです．小屋組を木造にしたのは，複雑な屋根を架けたいということもありますが，細いコンクリートの柱をたててみたいという願望もありました．

それから外構ですね．これは，コンクリートをうっても，タイルを貼っても，なにをやってもだめ，全部やられてしまいます．許されるのは芝を植えるくらいです．結局僕らがやったのは，芝と石を並べるだけ．これはいちばん安くて，誰にでもできて，直せて，という昔からやっている手法です．それと舗床ブロック，これも砂の上にのっているだけです．中庭は当初いろいろな要素からなる庭を考えていましたが，何度も設計しなおして，現在のようなかたちになりました．建物の中心に置いた収蔵庫の中に絵をしまって，冬を過ごすことになります．ひと冬置いてみてまずまずの状態です．屋根は，ガラス部分をのぞいてすべて金属で覆うというつくり方です．ガラス屋根からの万一の漏水と光の影響を考えて，絵の上に小さな庇を出す照明方法をとってあります．

●境界を曖昧にする方法

それで，いちばん最初に，どのような建物を建てようかと考えた時に，さきほどの理由から，きわめて現代的なものを建てたいという気持ちになったんですね．それが合うのではないか，と考えたわけです．これまで僕の場合，外はコンベンショナルで，内部をモダンにつくる方法を一般的手法としてきましたが，軽井沢では，外もかなり現代的につくろうと決断したわけです．

それでは，現代的というのはどういうことなのかというと，それは僕がこれまでインテリアでつくってきたような空間をそのまま外部にも及ぼす，ということなのですが，その時に，外と内とをあまり分けないようにつくったらどうか，と考えたのです．これは，この建物の基本的な性格であり，また，「境をまぎらわす」，「境界を曖昧にする」，という建物のつくり方の一般論にもつながってきます．

まず，基本的には中庭囲み型の平面ですが，中庭とそれをとり囲む建物の部分とを判然と分かたないように，融合させてみようと思ったのです．それがつくり方の全体に及んでくるわけで，たとえば外壁があってもその壁は室内の壁のように立っている，屋根が中庭の向こうに見えるといっても，その屋根は僕の自邸などでもやってたように，「家の中の家」として室内にもある屋根と同類の屋根です．つまり，通常，日本の伝統としてもいわれる「内と外の連続」を超えて，もうひとつ工夫された内と外の融合を考えたわけです．

なぜこうした仕掛けができるかといいますと，それが軽井沢の自然の力なのですが，周辺の林，低い建ぺい率などによって，建物全体をインテリア化する力に依存できるからです．つまり〈境をまぎらわす〉効果が，自然の力によって，ある程度保証されているのです．

境をなくす，境を曖昧にする手法を，具体的にいくつか挙げてみたいと思います．第１に，平面型ですが，中庭に擴れたような形状のガラス壁を設けて，通常の壁とはかなり異なった領域の境界をつくったこと．これは，ガラス壁の多層性が生み出すさまざまな効果と同時に，通常の境界感覚とはちがった心理的効果を期待しました．第２に，建物の色調の基本を銀とグレイにして，さまざまな材料を意識的に混ぜて，建物全体を色彩上の多様性にすることです．たとえば，外壁だけをとりましても，アルミ板，焼付け塗装鉄板，吹付けタイル，メッキ鉄板，ステンレス板，タイル，コンクリート打放し面，石貼りといったような材料を細かく混ぜました．同様な操作をガラス屋根や床面でもやっております．第３に，ミリメートル単位から10メートル単位にわたる寸法の混ぜ合わせ，ガラス壁と相似した不定形の細かい寸法をもった装飾をあちこちに入れ込むことによって，さまざまな寸法の混成系をつくり，寸法上の事物の境界を曖昧にすること．第４に，ガラス面への風景と建物の「うつりこみ」を計画することによって，実像と虚像の重ね合わせがおこり，たとえばガラス壁の周辺では，どの像が本当の柱であり樹なのか，一瞬わからなくなるような効果があります．第５に，ガラス屋根によって室内の状態が刻々と微妙に変化すること．これは，絵をみる体験の時間の経過を考えると重要なことだと考えました．この効果は，色彩の場合と同様な境界の曖昧さ，ただし時間的な曖昧さを招くと思われます．第６に，さきほど申しました屋根の効果，外の金属屋根と内のコンクリートの屋根とが「うつりこみ」によって思いがけない位置関係をつくります．

●多層構造

境界を曖昧にするという操作は，今日のデザイン活動にかかわる人びとが共通にもっている感性的な美学の表われだと思われます．それを簡単にいってしまえば，「アモルフ（不定形）でアンビギュアス（多義的）なものへの関心」であると思われます．こうしたもののあり方を表現するたとえとして，僕は，雲，霧，虹，蜃気楼といった自然現象を挙げてきました．これらは，かたちがはっきりせず，うつろいやすく，境界があるようなないような現象なわけです．

こうした関心事が，実は日本の空間的伝統の重要なひとつの側面であることを指摘したいのです．僕はこれまでもよく，「非ず非ず」にふれてきたのですが，これは境があって，境がない世界を指し示しています．そうした世界がひとつの理念であって，これを基礎にして日本中世の美学が築かれたわけです．これは結界などの概念に表われています．たとえばまた「混ぜる」とか「染みる」

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料③-2

などの概念にも表われています。亡くなられた吉阪先生がおっしゃっていた「非連続の連続」もいまにしてみれば，境界に関しての深い見解のひとつであったと思われます。境界を曖昧にするという意味は，連歌などでみられる「展開する」，同じところにとどまらない，同じことを繰り返さないという意味と同義になります。空間はどこまでも続き，空間の状態は時間とともに絶えざる変化をするわけです。

つまりこれは，決定論の世界，すなわち物は定義できるという世界に対する非決定論の世界なのです。非決定論というのは，なんとなく宗教的とか美学的と思われていたんですが，今世紀に入って，非決定論も本当なのではないか，とみんな思い始めてきました。たとえば，ハイゼンベルクの不確定性原理とか，それからポロックの偶然性の絵画，最近の様相論的な美学とか，つまり，非決定性の中にこそ真理があるんだという見方に添って，新たな世界観が展開してきて，それがたまたま日本の伝統とうまく呼応する時期がようやくやってきた，と僕は思っているんです。

かつては，晴れか雨か，といっていたのが，どうやら80%ぐらい天気である，といういい方が日常的になってきました。つまり，可能性の哲学というものが日常の中にも入り込んできて，ますますそういった曖昧さとか不定形というものが日常化してきた。そして，その響き，また，その感覚から見直した自然がきわめて現代的なものをもっている，と人びとは直感的に感じているのではないでしょうか。たとえば，シンセサイザーの音に聞くような自然が現代の自然観なのではないか，と思うのです。それは，さきほどもいいましたが，かたちが定まらないもの，現れては消えていって実在しそうもないもの，たとえば，虹とか雲とか，霧とか，蜃気楼とか，そういった非常にうつろいやすく，しかし，まったく秩序がないわけではないが，その秩序をいうことができないものなのです。

「かたちの物理学会」というのがありまして，私もそこに入っているのですが，そこでみんなが興味をもっているのがそういう「かたち」なんです。つまり，幾何学によって秩序付けられたものとまったくランダムなものの中間にある，アモルフでアンビギュアスなもの，その幾何学をつくろうというのがわれわれの共通の課題なわけです。たとえば，ペノワ・マンデルブロートのフラクタル幾何学なども，「かたちの物理学会」が喜ばしく思うようなそのひとつの成果ですね。

科学の対象になるという意味でのもっとも新しいものと，一方では，場所性とか日本人とかというところから見た空間的な伝統がたまたま合う，というのが今日の状況だとすれば，そこを拠りどころとして建物をつくるというのがどうやら正解ではないか，と思います。そして，それをひとことでいうと，やはり境界が不確かなものによって建物をつくっていく，ということなのです。たとえば，これまでの超高層のガラス面というのは確かな面としてありましたが，それが今のつくり方では，ある時その超高層が消えてしまうとか，時間によってまた位置によって見え方が全部違うというように，ガラス面という境界を非常に不確かなものにしようとするものになっている。それはすでにひとつのやり方としてあるわけで，それをもっと一般化していけばいいのではないかと思います。

そして，その境界を定かでなくするやり方が，「多層構造」だと僕はいってきたわけです。そして，そこに生み出される雲状の，霧状の空間の雰囲気を，ひとつの具体的な，境界を曖昧にする方法として出していったわけです。それが，グラーツから始まってミネアポリスまでの建築のモデルでの試みなのです。その題名は，多層構造のモデルということで，「オーバーレイ」と名付け，その副題は「意識の様相論的空間」としました。

●様相の表出

多層構造をいろいろとモデルにしながら，この軽井沢の建物をつくっていった，ということは事実です。

住宅を設計する場合でも，いつも多層構造のモデルをそのまま建築に直そうと思うのですけれども，どうもうまくいかない。なぜうまくいかないかというと，小さいわけです。住宅は，では，美術館ならできるだろうと思うと，またこれがまたモデル通りにはいかないんです。だから，これはなにか変換をしてやらなければいけないんじゃないか。たとえばガラスの面を平行に置くことは考えずに，斜めでもいいから重なるようにしてみるとかね。普通，住宅の長さというのは，長いものでも，20m弱なんですが，今度の軽井沢では40mあります。そうすると，少なくとも３層構成がとれるんですね。風景を入れると，うまくやると４重くらいできます。それで，いろいろなところで重ね合わせをやってみたわけです。その重なりがいちばん表れているのがふたつのガラスの三角の平面部分です。建物なのであまり無茶なことはできませんから，いろいろ控えめにやっているんですけれども，ある程度の多層性，重ね合わせは実現できたと思っています。

それは，ガラスとか空間が重ねられているというだけではなく，2.4m ごとに立っている柱によるものがあります。2.4m ごとに柱を立てたというのは，なにより柱を細くしたかったし，柱の重ね合わせを実現したかったこともあります。屋根の木造小屋組みも同様です。ただ，2.4m に柱を立てて，それで美術館で大丈夫なのかは，かなり心配して，機能的な面でもかなり検討しました。

多層構造という手法，これは特に新しい手法ではなく昔からあったものですが，ひとつの「様相」を表出する手法です。この「様相」という概念に，2,3年前気付いたのですが，この概念が，近代建築の「機能」に対応しているように思われます。そこで現在，「様相」をいってよいのだろうかと磯さんに提案しているわけです。つまり，ポストモダニズムといっても，その内実を表わす言葉が欠けている。それが長い間の僕の気がかりだったのです。

「様相」は，本来は，ある現象がそれとわかる，知覚される状態をさす言葉で，「赤い」「寒い」「重い」といったことどもが事物の様相です。しかし，これまでに話してきましたように，「境界が曖昧である」という様相，現代的なひとつの様相を時代は追おうとしている。たとえば，超高層のファサードにしても，時としてふっと消えてしまうようなファサード，まわりの景観をうつして自分のほうは消えてしまうファサード，時間によってあるいは観測位置によって表情がかわるファサードなどに関心がもたれます。こうした表現は，広い意味で境界が曖昧なものに対する関心であるといえるでしょう。

最近では，建築計画学でも景観，家並みといった事象に関心がもたれるわけですが，これらも，ここでいう「様相」への関心であるわけで，おそらく今後，様相を記述したり分析したり，新しい手法やヴォキャブラリィが見出されていくことと思われます。そうでないとすると，従来の機能論では説明できないでしょう。

同様にデザインにおいても，すでに古典的な建築の手法を組み合わせながらつくる作法が確立されているように，新しい様相を表出するための手法や方法が見出されていくに違いありません。しかし，機能論的につくられた建物には，それにふさわしい様相がたち現われるわけで，もうひとつ下がったレベルで用意された手法によって，僕の関心からすると多層構造という手法によって，実際の建物の様相は表出されるということです。

ただ，誤解を招くといけないので，ふれておきたいと思いますが，僕の理解では，様相は機能を包摂するわけで，機能的な配慮なしに建物ができるのではまったくない。これを「快適さ」の観点からいえば，「フィジカルな身体にとっての快適さ」は当然実現しなくてはならないのですが，さらに住む人びと，その建物に訪れる人びとにとっての「意識にとっての快適さ」に心を配るということだと思われます。そうした意図を学問的にみれば，環境心理学に見ることができるのです。ただ，今後の研究に待たねばなりませんが，意識にとっての快適さは，おそらく一般解はなく，結局は主体的なデザインが決定するところの個別的な解になると思われます。

●親自然的建築

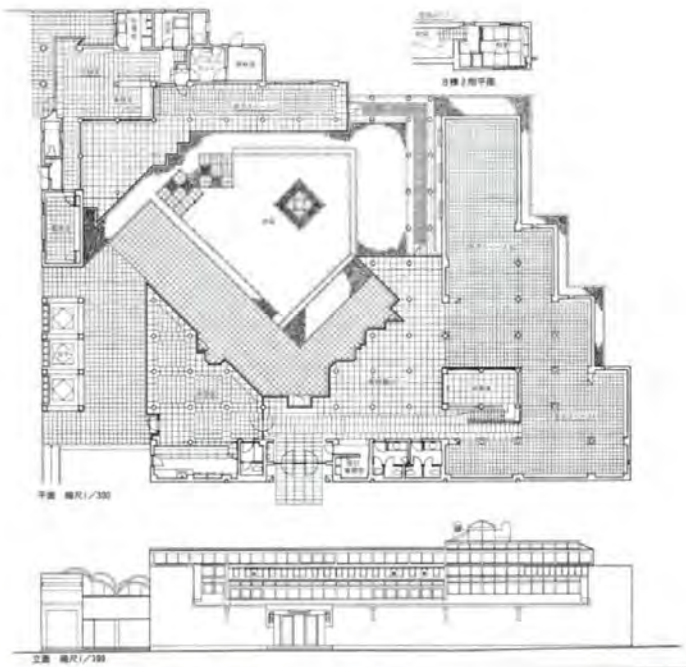
もっと，いくつも例があると思いますけれども，われわれが今，関心をはらっているのが，親自然的な建築です。日によって，時間によって微妙に変化する，様相が移り変わってゆく建築，もちろん，建築の外にいればその移り変わりをダイレクトに受け取れるのですが，建築の内部の空間の移り変わりというものには，いちどフィルターを通した，なにか演劇的な交換がなければいけません。それをうまくコントロールし演出していく必要があります。親自然的な建築で，ひとつ僕がずっと思ってきていることに，建築の設計というのは，空気の設計なんだ，ということがあります。中に入った瞬間，空気が変わる，その空気がどういう種類の空気か，というと，僕が考えてきたのは，最初は水の中にいるような空気，最近はアニメーションの世界とか，あるいは人工衛生で見るような宇宙の光ではないかと思うんです，宇宙には空気はないんだけれども，そういった宇宙の空気みたいなものが表出できないか，というのが僕のひとつの課題ですね。

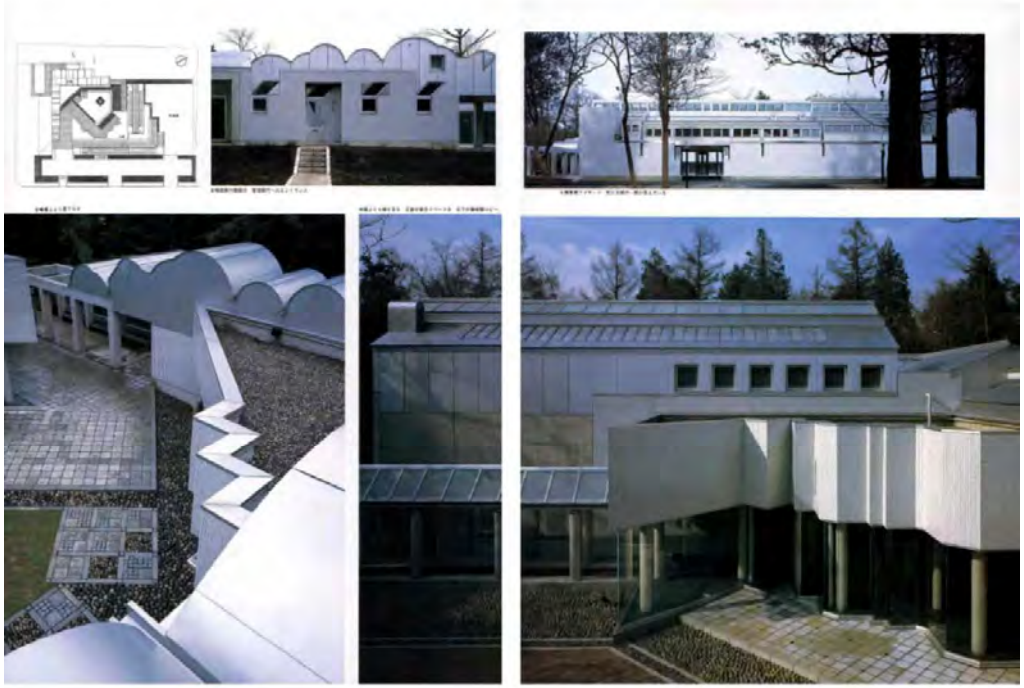
それは，今回の場合だと，かなり全面的に曇りガラスを使えたので，ある程度，考えていた光の状態が実現できました。今まではトップライトは局所的にしか使っていませんでしたが，これはかなり全面的に光を入れないとできないなと分かったのは，軽井沢の近くに小さな版画の工房をつくった時のことです。そこでは，いろいろなところから光を入れて，光のミキサーみたいなものをつくったんですね，そこで，いろんな角度から入ってくる光の微妙なリフレクションによって，なにか異種な空気ができるんだな，と思ったのです。そして，軽井沢だったら光が透明だし，美術館だからもちろん直接光は絵に影響のないところでしか使えないとしても，透明なものと半透明なものを組み合わせて，それによっていろいろな角度から光が入ってくれば，なんとなく空間全体が曖昧になっていく，その境界があまり定かでないような雰囲気の場所ができるんじゃないかと考えたわけです。

●

いろいろなことどもを語りましたが，必ずしも全体的な把握ができていっているのではなく，同時代の建築家たちが抱いている感覚のひとりの共有者として，呼びかけているといったふうに理解していただければ幸いです。今，僕たちは共同してデザインの展開をはかろうとしている，その一端として，田崎美術館があり，この建物は，僕なりにあれこれと探索してきたところのひとつの集積であると思っています。様相論といったところは一般的な話題であり，田崎美術館は個別の事象です。そうした一般と個別とを重ね合わせるようにしながら，僕らのデザイン活動は展開してゆくと思われます。

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料③-3





⑤ 善光寺雲上殿本殿（長野市:1949年･昭和24年）

◇ 設計者:渡辺仁建築工務所 沖津清

善光寺雲上殿本殿

「原設計：文部省技師　塚本慶尚
設計：渡辺仁建築工務所　沖津清」

善光寺雲上殿は長野市の善光寺本堂から北へ約１キロメートル地附山の中腹にある善光寺平を一望する大納骨堂である。昭和2年に**文部省技師：塚本慶尚によって設計**（原設計）されたが、内務省の建設許可を得ることができなかった。
その後、昭和10年に再度設計に着手した。塚本の設計に準ずるように**渡辺仁建築工務所：沖津清によって現在の雲上殿が設計**された。昭和10年9月に着工したが、日華事変、太平洋戦争の影響で戦後昭和**24年4月20日**に落慶供養法会が執り行われ、完成に至った。

伊東忠太
↓
関野　貞 ⇔ 塚本慶尚

明治27年　「善光寺附属建物の再建及び新築の大計画」
明治30年6月　古寺保存法公布
大正3年　長野市清水寺実測調査
大正9年10月　善光寺諸堂の調査
大正10年3月～大正11年
山門の屋根の葺き替え工事など
大正10年10月　伊藤忠太が善光寺で講演

北澤五郎 ⇔ 沖津　清
↓
渡辺　仁
大岡　実

昭和10年1月15日　納骨堂建立の寄付金募集が認可
納骨堂建立実現に向けて動き出す

昭和10年3月29日
長野市出身の警視庁建築**課長北澤五郎氏の斡旋**により建築界の**権威渡辺仁**氏に新規設計方委嘱その承諾を得た。大体の方針では文部省嘱託であった**塚本慶尚**氏によって作られた原設計図の長所は成るべく生かし、特に保存会の懇請を容れて伊東忠太博士も設計作成上に助力する由である

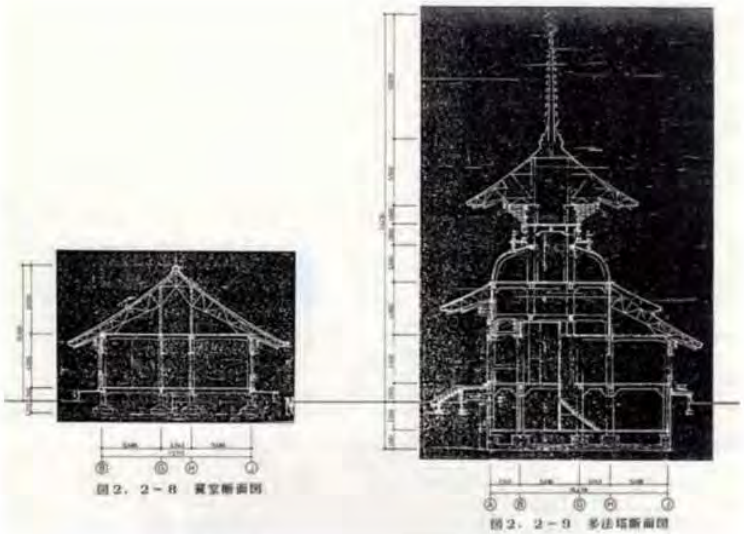
昭和10年7月22日　渡辺仁が設計図を持参

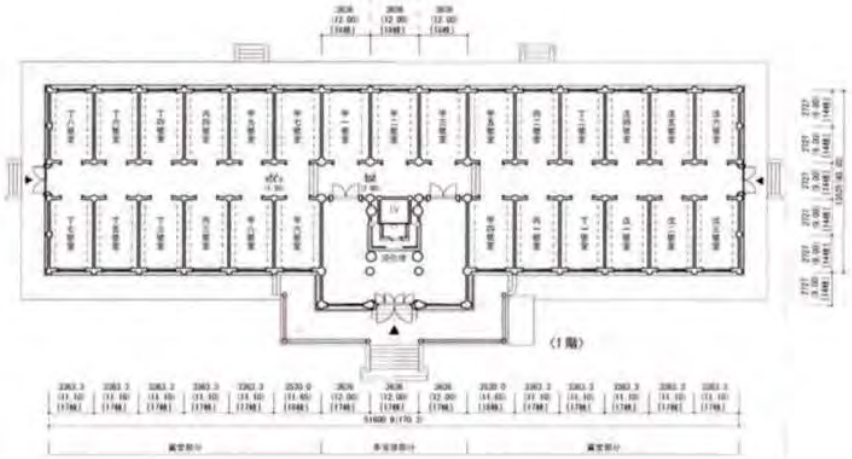
「塚本慶尚」の設計を引き継いだ渡辺仁建築工務所の「沖津清」
（昭和10年）

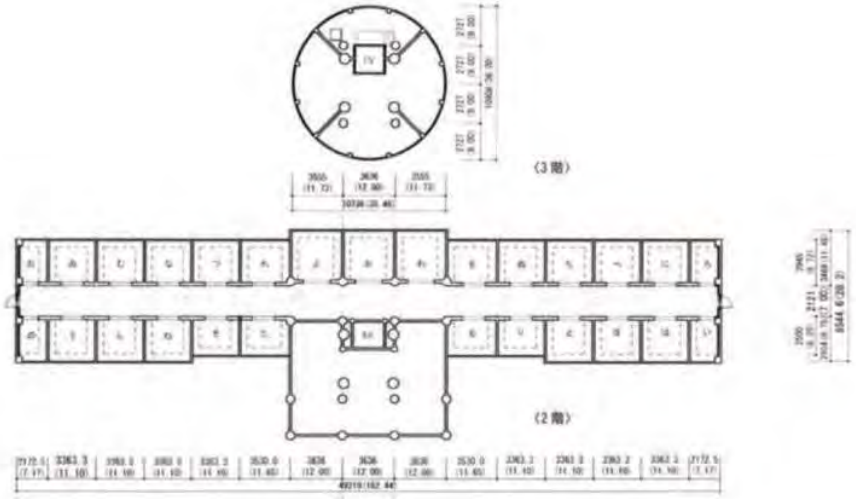
塚本の設計を継承し多宝塔形式としており、安定感と優美さを持ち意匠面で高く評価されている滋賀県大津市の石山寺の多宝塔を参考にしている。

「沖津清」：昭和27年に発足した長野県建築士会の初代会長を務めるなど、長野における戦後建築界の礎を築いた建築家として知られる。雲上殿の設計は、こうした沖津の長野における活動の端緒となった仕事として重要である。のちに善光寺忠霊殿の設計なども行っている。

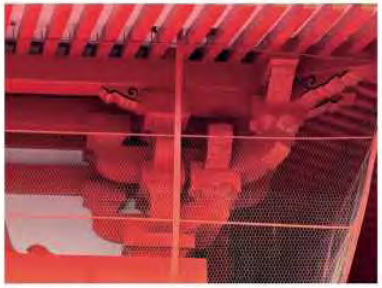
■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑤-2







■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑤-3



⑥　守谷邸（長野市:竣工年は不明）

◇設計者:林雅子

個人情報により、図面掲載は不可とする

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑥- 2

⑦ 守谷第一ビルヂング（長野市：1963年・昭和38年）

◇ 設計者：林雅子

長野県の北部、長野市の長野駅近くに建つ「門がまえのオフィス」（現・アイビースクエア）は林雅子の設計した建設業者の旧本社ビル。RC 造で第一期は 1959 年から設計、1963 年に竣工。第二期は 1974 年から設計、1975 年に竣工した。一期工事のあと二期工事が行われ、門構え以外の事務所棟は取り壊されて８階建てのオフィス棟となっている。

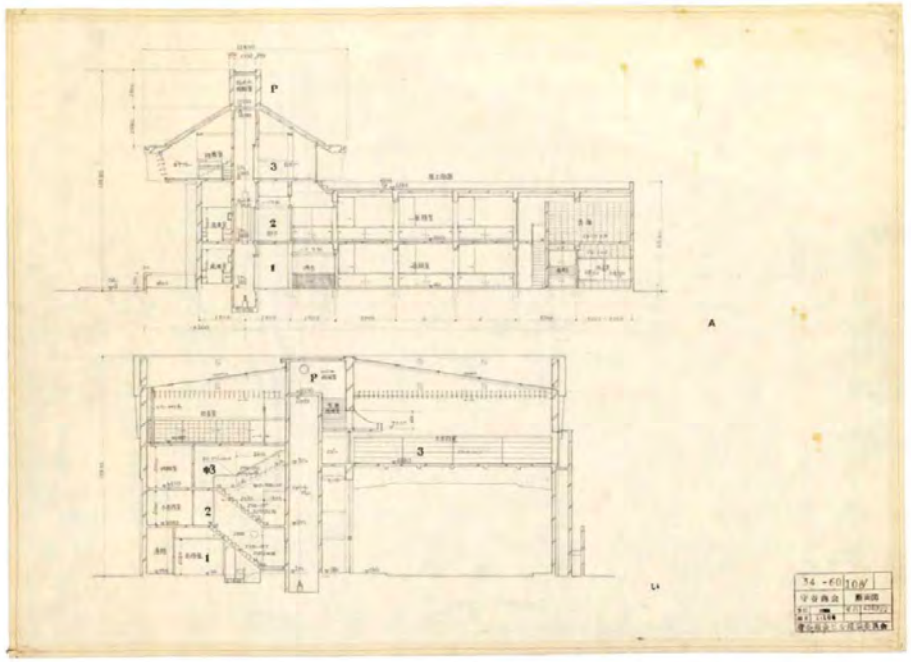
大きな RC 造の打ち放しのピロティに日本瓦葺の大屋根を載せて門がまえを構成している。南北方向に立てたリブ付き壁版のつなぎの棟部にダブルガーダーを渡して間を割り、採光やボイラーの煙突、エレベーターの用にあてていた。棟の二つの梁の間は上下に分けた RC 梁でつなぎをとっている。竣工後５年ほどで建て増しが必要になったが、施主は林雅子により設計された建物を大変気に入っていたため、引き続き第二期の設計を依頼された。施工は施主で発注者の株式会社守谷商会が行ったが、規模の大きな高強度の RC 造建築で大屋根の傾斜スラブの施工を行うなどそれまでに経験のない時代の先端を行く工事内容であった。このため建設会社としての技術力の向上や竣工後の新規工事受注にも寄与した。

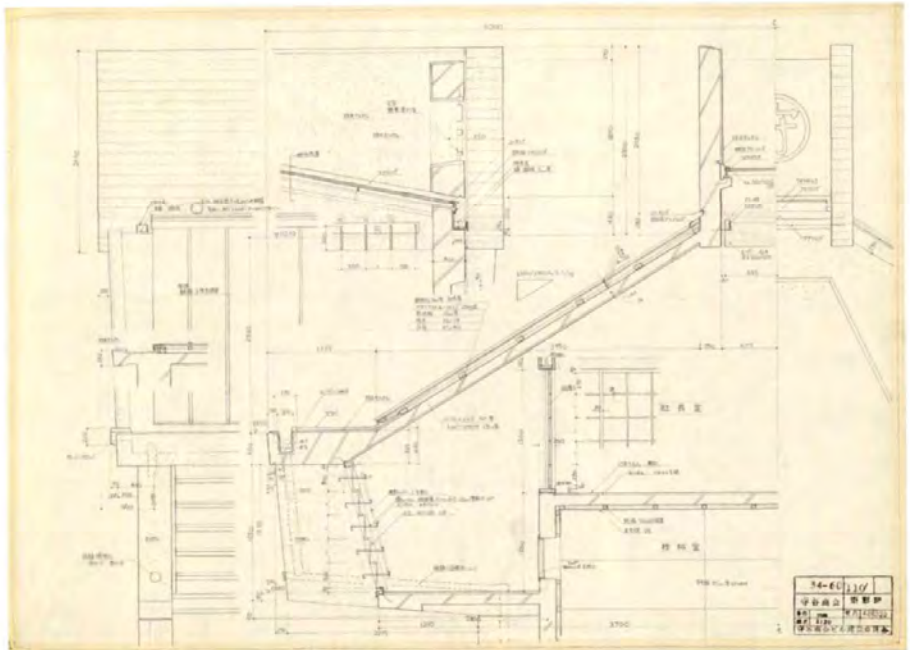
日本を代表する女性建築家のパイオニア林雅子の初期の作品であり、独立住宅の設計が多かった氏の作品としては珍しい RC 造のオフィスビルである。当時、周囲は瓦を載せた木造二階建てが立ち並んでいた。ここに新たに立つ RC 造の構造物と周囲との調和を図るために考えられたのは大きな門がまえに瓦を載せた大屋根であった。この大屋根に設けられたトップライトは暗がりとなってしまう部屋の中心部に光を導入し、内部を心地よい空間としている。このトップライトは林の最初期の作品から最後の作品まで採用されており、後に竣工する「海のギャラリー」へとつながり、間口いっぱいに大胆に開け放った橋の下のような空間は、後の「ギャラリーをもつ家」などの作品へと展開してゆく。この「門がまえのオフィス」（現・アイビースクエア）は林の作品の原点となった作品の一つであり、日本建築の伝統を受け継ぎながらも形式に拘らず当時の新しい技術を取り入れ、確かな骨格に大胆なデザインと緻密で想像力にあふれた細部によって空間を構成させたことが評価される。

林は 1958 年、「林・山田・中原設計同人」設立する。女性建築家の先駆けとして評価される。林・山田は日本女子大学家政学部生活芸術科住居学専攻、中原は東京家政専門学校卒業でともに多くの住宅の設計を手掛けている。林は 1981 年女性建築家として初めて日本建築学会賞する。３人とも開口部に障子を設ける等、日本文化や日本の生活空間を作り上げた存在でもある。

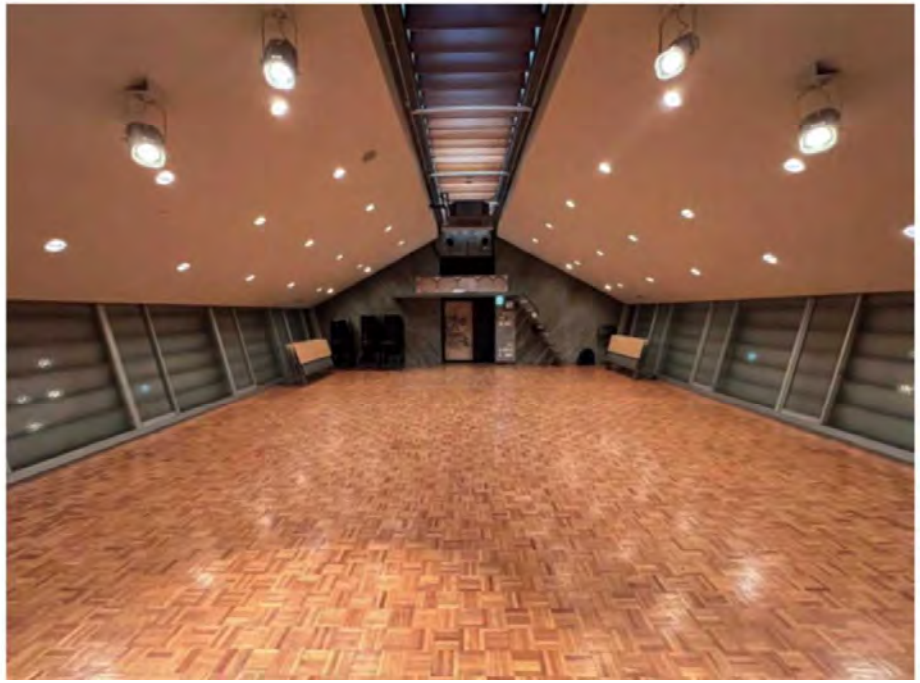
現状

竣工時は２階建てに瓦を載せた木造家屋が立ち並んでいる場所であったが、高度経済成長期や長野オリンピックを経て周囲の環境は激変している。社長の自宅や作業場があった東側は区画整理が行われ、時折イベントの行われる公園となり、西側は中層のビルや駐車場となっている。建物の１階はオープンテラス席のあるカフェとなっており、門がまえの下を通り抜けて公園へ抜けられるため、市民や旅行者のための屋外空間として機能している。コンクリート打ち放しだった外観はすっかり蔦に覆われており、「アイビースクエア」と呼ばれて長野市街地のランドマークとなって愛されている。施主であり施工者でもある守谷商会の本社機能はすでに移転しているが旧社長室は関連会社のオフィスとして、大会議室は一般に利用されるホールとして使われている





■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑦- 2



■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑦- 3

⑧ 北斎館＋小布施町並修景事業（小布施町:1976年･昭和51年～）

◇ 設計者:宮本忠長／宮本忠長建築設計事務所

■概要

「北斎館」

葛飾北斎（1760-1849）は郷土の先覚・高井鴻山（1806-1883）の招きにより、晩年４回にわたり小布施を訪れ多くの肉筆画を残した。この貴重な肉筆画が町外へ散出するのを防ぐために、北斎作品を集めて保存するための収蔵庫として新築（Ⅰ期工事・1976 竣工）された。その後の来館者の増大に伴い、ホール・展示室・管理室等の増改修（Ⅱ期工事・1991 竣工）を行い、美術館機能としての充実を図った。そして北斎研究の更なる充実を図るために、展示室・収蔵庫の増改修（Ⅲ期工事・2015 竣工）を行い、小布施の文化・芸術の拠点施設として昇華させた。さらに、地域住民や観光客をが小布施の農業生産者やアート作家と繋がる場として、ショップとカフェの増築（Ⅳ期・2023 竣工）を行った。

「小布施町並修景計画」

北斎館の開設に伴い、静かな町に多くの観光客が訪れることとなったが、一方で近隣住民はそれまでの「場の風景」が壊されつつある危惧を感じていた。「街並修景計画」では古きよきものを残しつつ「新しい場」を創り上げることを志し、「ソトはミンナのもの、ウチはジブン達のもの」という共通理念のもとで町並み景観・環境整備が進められ、全国から注目され続ける町となっている。

■建物の特徴

「北斎館」

新築時は町内の北斎作品を保存する収蔵庫として計画されたため、畑の中に２つの土蔵（納屋）が建つイメージによりつくられた。その後、来館者の急増を受け美術館へと増改修を行う。収蔵庫、展示室などそれぞれの機能を持った５つの和瓦の寄棟屋根の間をフラット屋根でつなぐ構成とし、当初と同じ土蔵のイメージとしてⅣ期の増築・改修を経て現在に至る。北斎館は小布施町の中心に位置するため、周囲のスケールに合わせた屋根にすることにより、瓦の屋並が連なる景観の一部となっている。

「小布施町並修景計画」(1975-1996)

北斎館の計画を期に、建築家：宮本忠長、小布施町：唐沢彦三（当時の町長)、町民代表：市村次夫・市村良三、宮本忠長建築設計事務所：久保隆夫の５人が一致協力しての修景プロジェクトが始まり、1975 年から 1996 年にかけて約 100m×120m、５地権者（町・民間企業・個人）において事業が推進した。

「町並修景計画」は初めからのマスタープランなど無く、エリア内奥部の条件の悪いところから居住性を改良することから始め、良質な既存建物は手を入れて残し（保存建物７棟、改修・曳家 14 棟)、その繰り返しにより徐々に内懐から外表へと町の様相を新たに生まれ変わらせていった。また「ソトはミンナのもの」という共通認識を常に共有しながら、既存敷地割を等価交換により私的外部空間から公的外部空間へと再構成することで新たな価値を生み出し、エリア全体を散策したくなるような町並空間へと昇華させていった。具体的には共同駐車場を「風の広場」として開放し、官民境界を露見させない路地「栗の小径」で邸宅の中庭を開放し、笹で覆った小布施堂の土地を「笹の広場」として開き、訪れる人が自由に散策できる空間となった。

■評価（作家性・革新性）

宮本忠長は 1927 年須坂に宮本茂次の長男として生まれた。祖父長作は宮本組という長野で一二を争う建設会社を興した人で、父茂次は逓信省の営繕課で勤務した後、須坂に設計事務所を創設した。宮本忠長は、1945 年に早稲田大学専門部建築学科に入学、48 年同理工学部建築学科を卒業した。１学年上には、菊竹清訓、穂積信夫、同級に、池原義郎、阪田誠造がいる。大学では教授の佐藤武夫に私淑し、卒業後、佐藤武夫事務所に務めた。佐藤武夫は近代建築の推進者として活躍し、数多くの劇場や庁舎建築の設計で知られている。その後、1964 年郷里の家業を継ぎ、宮本忠長建築設計事務所とし独立した。同年、長野市庁舎を佐藤武夫の監修で宮本忠長の設計とし長野での設計活動がはじまる。その後、小布施の栗ケ丘小学校の設計をした縁から「小布施町並修景計画」につながる「北斎館」を手掛けることとなった。修景計画においては、計画的な進め方ではなく、次から次へと依頼された増改築や新築を関係者と共に試行錯誤を繰り返し、小布施の良さを増幅する形でつくり上げた。建築単体の設計を行うだけでなく、エリア全体の地割を含め再構築し、建物と建物の「間」をも併せて計画したことは他に類のない事例となり、日本の町おこしの火付け役になった。「毎日芸術賞」「吉田五十八賞」などを受賞し高い評価を得ている。

1981 年長野市立博物館が建築学会作品賞を受賞することで、宮本忠長は全国に知られる存在となり、「小布施町並修景計画」をも広く知らることとなる。当時、東京中心の建築単体が評価される時代において、地割を含めた「間」をもデザインした「修景計画」は衝撃をもって知れ渡ることとなり、地域に根差したローカルアーキテクトとして注目され続けることとなった。

宮本忠長は普遍性を求めたモダニズム建築の精神を踏まえたうえで、その地（リージョナル）の社会環境や風土性、経済的クライテリアをも含めた建築のあり方を追求した。さらに地元産の材料や職人の大切さを考えたことから「信州名匠会」を設立するなど、リージョナル・アーキテクチャーの世界を展開した。

■現状

2005 年に役場内に川向正人研究室が「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」を新設し、小布施のまちづくりは新たなステージへと動いています。小布施町は今も「ソトはミンナのもの、ウチはジブン達のもの」を共通認識として展開し続けている。

■データ

建築年：1976 年から

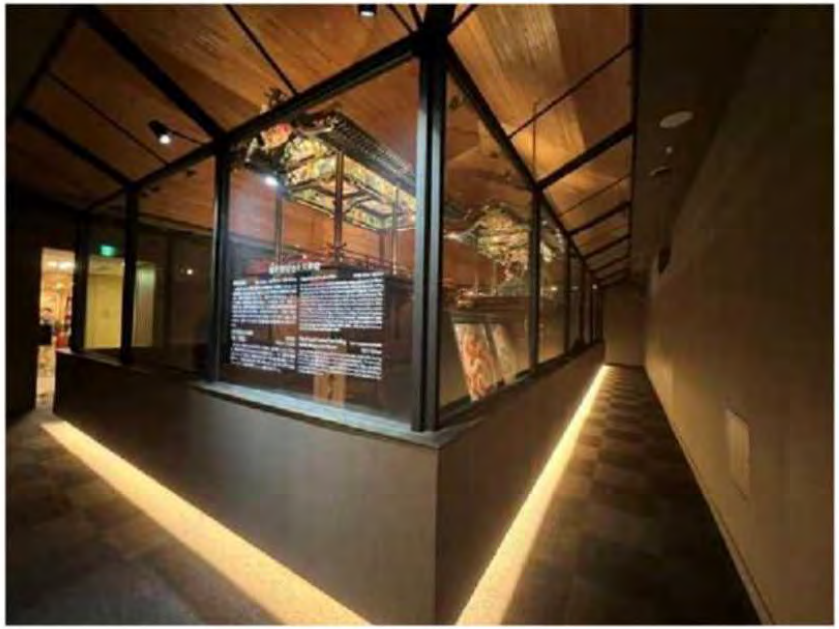
設計者：宮本忠長建築設計事務所

施工者：北野建設株式会社

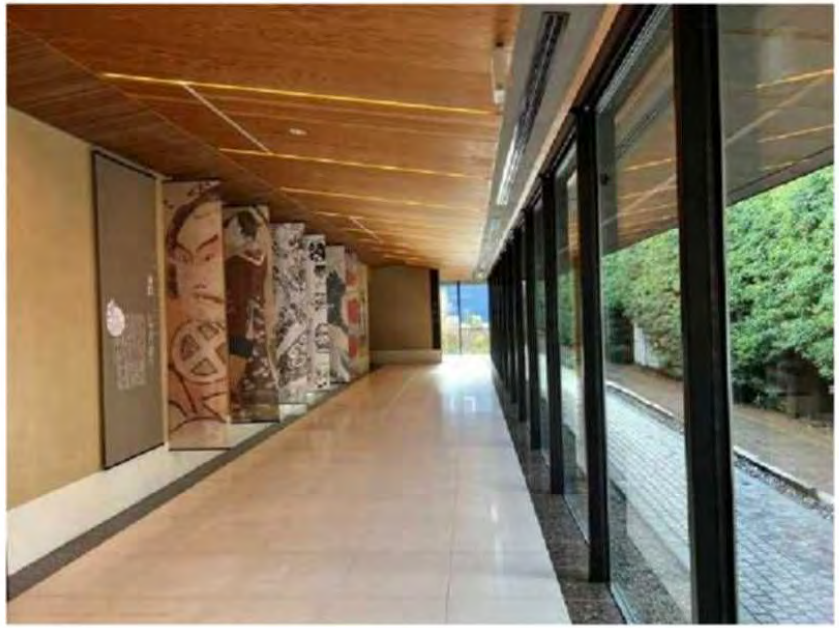
■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑧-2

2023 外観

一期工事竣工時



内観



内観

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑧-3

笹の広場

栗の小径

小布施堂本店

風の広場

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑧-4

宮本忠長建築設計事務所・西澤様　資料１

1. 設計条件

北斎館（葛飾北斎の美術館・昭和51年竣工）の出現は、町外からだれ一人訪れることのない信州の静かな里であった小布施を、年間3万5千人が訪れる観光地に一遍に変えてしまいました。

生活の**場の風景**が壊されつつある危惧と同時に、この際、場の風景を思い切って古きよきものを残し、新しい棲み家（場）を創りあげようと言う雰囲気が、館周辺に棲む人達から聴こえてくるのでした。館周辺の隣人とは、北斎館をはじめ、小布施堂（栗菓子製造、日本酒醸造）、長野信用金庫小布施支店、高井鴻山記念館、市村（次夫）家、市村（良三）家、真田家の方々です。中心になる人物は、市村次夫です。彼の父（故人）は北斎館の生みの親（当時町長）です。彼は地元の人望も厚く、リーダーにふさわしい能力のある青年実業家であり、且つ、文化人でもありました。彼は陰に陽に、隣人間の交渉に当たり、設計者である宮本忠長と組み、新しい生活環境の創生に献身しました。即ち、宮本忠長、当時の町長唐沢彦三、民を代表した市村次夫、市村良三(現町長）と、宮本忠長建築設計事務所の久保隆夫の五人が、一致協力して、プロジェクトが始まりました。これが「小布施街並修景計画」として、1975年から1996年にかけて事業推進しました。

小布施町並修景計画年表

1976.10　「北斎館」完成

■町の人口拡大策（～12000人）に関連して土地造成事業の公益金を運用し、北斎画などの文化資材を保存する目的で計画。町の人々の収蔵庫的機能をもった美術館として発足。

1978.06　北斎館前に「宗理庵」完成

*お休み処としての目的

1978.09　「桝一・本店」改築

*（小布施堂酒造部）

1981.06　小布施堂栗菓子工場「傘風舎」及び造園完成

■公益性を持った空間を提案。北斎館発足以来、急激に増大した来訪者対策と住環境問題の狭間で、民間製造工場のあり方など多くの課題に対し、北斎館と対面する構成とした。
建物間の私有地を緑化し、機能を持った”間”を醸成。

1982～84頃　修景を手法とする基本構想の模索期

1984.01　「S邸」の完成

*第一工区として着工。５地権者による修景計画の手始めであり、個人への負担を最小限にという計画の骨子もあり、着工期等については軽人レベルの事情を汲みながら、外部環境は共有する「ソトはミンナのもの、ウチはジブン達のもの」という理念を共通で確認。

1984.12　「I邸」完成

■第二工区として着工。

1985.05　「栗の小径」など完成

1986.01　「長野信用金庫小布施支店」

1986.05　「高井鴻山記念館管理棟」移築

1986.03　～県道沿い歩道整備開始

1986　小布施町総合計画後期基本計画策定に「環境デザイン協力基準」を制定

1987　小布施町HOPE計画策定

1987.04　「小布施堂本店」完成

1987.06　「風の広場」完成

1989.09　「傘風舎」増築

*第一次修景計画が一段落し、修景の論理も定着。”小布施方式”と評価を受ける。住宅の中の製造工場は高さ、ボリューム、色、材料、建物の表情、周囲の敷地との繋がり方など様々な配慮が必要であった。

1990.10　小布施堂会議棟完成

■小布施町の「うるおいのある美しいまちづくり基準」制定

1991.10　「北斎館」増築

*第２次修景計画

1991　小布施町第三次総合計画の策定
「うるおいのある美しいまちづくり助成」の実施

1992.06　「SAN POO LOH」完成（小布施堂飲食店）

*北斎館前の小布施堂飲食店舗。灯りが少なく暗い夜の小布施に、夜景の美しい場所づくりの要望があり、計画。

1992　小布施町景観づくり指針、住まいづくりマニュアル、広告物設置マニュアルの発行

1994.03　小布施ガイドセンター完成

1996.03　小布施千曲川ハイウェイミュージアム完成

■H9年10月上信越自動車道が中野I.Cまで開通し、小布施町の西側の千曲川に沿って走る。来訪者が立ち寄れる場をつくろうと、小布施総合公園（千曲川ハイウェイオアシス）を計画。駐車場に車を止め、シャトルバスやレンタサイクルで町内を散策できる。

1996.03　ゲストハウス小布施完成

■道路拡幅に伴い、取り壊されることになっていた旧家の土蔵２棟をB&B方式の宿泊施設に改造した。

1998　長野冬季五輪

*その間、町全体として生活環境整備を充実していく。

■第３次修景計画が始動中。

小布施町並修景計画エリア（修景後）

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑧-5

2．デザインのねらい

小布施のまちづくりは、現状からの改造計画ゆえ、正直なところマスタープランなど描ける状況でないのが本音です。（もちろんイメージプランはありましたが。）同一エリア内奥部のいちばん条件の悪いところ（日照、日射、通風など等々、防災、消防）からメスを入れて手術するように、内懐の居住性を改良し、その繰り返しの中で形容が外表へ現れる時、通りに面した家並みや空間尺度から、まちの様相が新しく生まれ変わってくるのです。正に内懐から外表へとプロセスを踏む道程は重要なポイントでした。

１～３期までの事業の中で、保存された建物は７棟、改修・曳家された建物は14棟あります。「**ソトはミンナのもの、ウチはジブン達のもの**」と言う理念のもと、「修景計画」では、既存の建物や塀を再構成していきました。

修景計画前は、短冊形の敷地割で、細長く伸びた庭や畑といった個人所有の外部空間が多かったため、街道に面して間口が狭く、歩道も細かったのですが、修景計画後は、土地を等価交換等し、公益性のある外部空間が生まれ、エリア全体が散策したくなる空間になりました。例えば、風の広場は、車社会によって必要になった駐車スペースの問題を、１軒だけではどうにもならないが、数軒集まることによってなんとかなるという手探りの状態で解決策が練られた結果できたものです。

修景計画前と後では、外部空間つまり建物と建物の「**間**」の空間の性格が大きく変化しました。広場や道空間のあり方を重視し、建物を曳家して、塀を取り除くことによって、ゆとりを生み出し、その「**場**」に公益性を付加して新たな利用価値を見出し、現在の小布施のまちなみはつくられていったのです。加えて、常住者の居住性能が完全に確保され、生活の小路や子ども達の通学路などを十分確保し、企業や生産工場も個々の機能を満足させ、「**どこの誰も犠牲にならない大原則**」。そのような試みが小布施町のまちづくりのなかで見事に開花したのです。

修景計画エリア航空写真

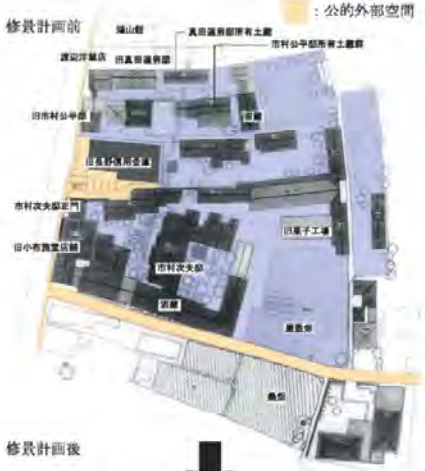
傘風舎完成頃（1981）

風の広場完成頃（1986）

小布施町町並修景計画エリア：外部空間の変容

：私的外部空間
：公的外部空間

修景計画前



修景計画後

笹の広場

この広場は修景計画の起点となりました。小布施堂による「自分の土地をパブリックに開放するという発想」から生まれたこの広場は、小布施堂の屋敷畑を取り囲む塀を取り払い、北斎館の前庭として作られました。傘風舎の建設によって出た土を用いた「葵山」を基本コンセプトにしています。屋敷畑にあったメタセコイヤや松も残され、この広場のシンボル的存在になっています。

修景前：塀で囲われた屋敷畑　　1期（1981）　　2期（1992）

風の広場

真田家、市村家、信金、鴻山記念館・小布施堂の私有地を各々の必要台数をもとに既存の土蔵や建造物を曳家させ、内懐までの奥行きの深い共同駐車場とし、「ひとつのひろば」が生まれました。

広場奥の正面にある土蔵（当時、市村公平氏の所有）「留蔵」は全く動かさず、昔からあった位置を記憶に留める役割も果たします。このゾーンには、幕後何百年という古建築が街道に沿って並んでいたのですが、曳家や改修を積極的に行って、建物の表層や素材を「留蔵」と連続させながら、広場を囲むように再構成しました。自動車を閉め出すとまちの中心部のイベント広場にもなります。これはコロンブスの卵のように予想以上に効果的でした。

栗の小径

「栗の小径」は、かつては西側に既存の土蔵2棟、東側には畑が広がる畦道でした。そこに、内懐の生活道には路地が不可欠だと考え、路地空間を新規につくりだすことにしました。それには、蔵づくりの鴻山記念館の保存（土壁、腰羽目板張の補修）をしつつ、官民境界を露見させず、バリアフリーで、ゆとりのある自然体の風景を創出しています。

畦道であった頃

この新しい生活道は町内の子供達が命名して「栗の小径」と愛称されています。幅の狭い疎水の流れも風情を与えています。

歩道

小布施町のシンボルである「栗の木」のブロックを用い、県道である前面道路も民地の部分も同じ舗装で、内懐の小路がそのまま外表へ繋がってくるイメージをつくりました。植栽や樹木なども従来のものを移植しました。また、歩行者がゆったりと散策できるように歩道を拡幅するため、様々な配慮をしました。信金と小布施堂本店がセットバックをし、街道に対して斜めに接する敷地に南に正対するように建物の配置をしたので、三角形の空間ができました。

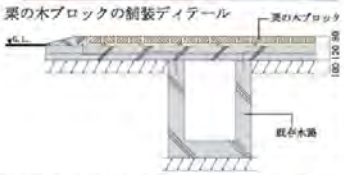
また、表通りの修景斜線（建築基準法の道路斜線とは違います。）を基準にそれぞれの軒庇の高さを揃えています。

■　保存問題委員会・長野勉強会建築資料⑧-6

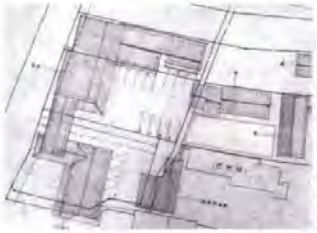
修景前の地割図

修景後の地割図

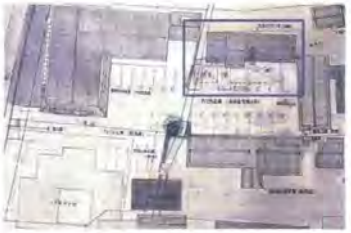
栗の木ブロックの舗装ディテール



風の広場　配置計画の過程



(1984)



(1986)

(1986)

3. 具現化に際し工夫した点

イ）関係機関との調整

第一次修景計画では、5地権者（町、民間企業、個人）それぞれ各々が持っている希望をかなえるために、設計事務所が中心となり、不整合な条件を整理し、土地の等価交換や、借地等の条件交渉を市村次夫がまとめ、事業を実現しました。

町の領域である栗の小径は、認定外道路の払い下げ、付け替え、個人所有地の借地により、町道（遊歩道）ポケットパークを一体で整備しました。この際、舗装材として、地場産（小布施町）栗の木ブロックを採用するに当たり、町、道路課と町道としての耐久性、安全性について協議、工法の確認等を行いました。

県道歩道整備は、県道拡幅計画（8m→16m）を、車道を拡幅するのではなく、歩行者の安全確保のために、現歩道と、道路後退となる民地を一体整備することを、設計事務所と町が県建設事務所と交渉をしながら進めました。ここで特に苦心した点は、

1）歩道の舗装材に栗の木ブロックを使用すること。（維持管理については、町が責任を持つことで認めてもらう）

2）　県道歩道では一般的にはその当時認められなかった図1のような歩道断面を、歩車道ブロックのような段差によってではなく、歩道の広さで安全を確保することで認めてもらう。

等でしたが、建設事務所に今計画の趣旨を理解していただいたことで実現しました。

ロ）設計条件の見直し

この計画は、最初からマスタープランの制作はできません。（もちろんイメージプランはありましたが。）そのため、1軒完成すると参加5者による協議を行ない、その都度計画を考え、当然設計条件も変化しました。

それぞれの施設に駐車台数何台必要という命題に対し、塀や境を無くし「ミンナで利用できるようにしよう」というように、機能を持たせながら、ソト（間の空間＝笹の広場、栗の小径、風の広場）はミンナのモノという共通意識を常に共有しました。

建物と建物が相互に干渉しあう関係性、「間」の空間（風景）が主役であるとの考えから、素材、色、屋根勾配、景観斜線（法的な高さ斜線で無く、人間の視覚的スケールとしての斜線）等を考え計画を進めました。

ハ）ディテール

「まち」は、再開発等で突然全てが新しくなってしまうのではなく、新しいものと古いものが共存し、歴史、伝統、文化といった、その土地固有のゲニウスロキが漂うかのように保存維持することがデザインの手法の上で大切だと考えました。

小布施に多く見られる民家（切妻屋根、日本瓦葺き、土壁、腰羽目板、切石）の素材感、寒冷地ディティールとしての必然性をクリアし、現代の工法を加えながら耐候性のディティールを考えました。

間の空間（笹の広場、風の広場、栗の小径）においても、時の経過によって味わいの出る素材（栗の木ブロック9cm×9cm×6cm）を使用しました。栗の里、北斎のまちと言われ、大勢の人々に親しまれている小布施には、当然、栗林が多く、栗の古材もありました。ですから、栗の木を使って歩道の舗装仕上げにと考えたのです。

ニ）施工方法

この計画は20数年にも及び、現在もまちづくりは続いています。この間このエリアだけで30件以上の工事が発注されました。発注は施主それぞれの選択ですから、全て異なる施工者でした。小規模ながら、工事の質、レベルの維持のため、毎週定例会議を行う等設計監理に力を入れました。

また、設計監理と並行して、全体の施工管理する人を移植し、各工事の工程調整、技術管理を行ない、工事の質の均等に留意しました。

ホ）コストダウン

工事は各自の発注とし、小規模工事を直営的に地元施工会社に発注することで、コストを抑えました。

また、古いモノを活かすことがコストダウンに繋がっています。古い蔵や町家を曳き家し、解体時の古瓦や切石を再利用しています。これはもちろん単にコストダウンのためだけでなく、この地の時の記憶を大切にしようとするものです。

また私共、設計事務所の設計管理契約もその都度ごとの取り交わしですが、これも修景プロジェクトの実態の一つの方法と考えています

風の広場：コンクリート洗い出しによる風紋のデザイン

栗の木ブロック敷き

高井鴻山記念館の曳き家風景

高山鴻山記念館は三度にわたり曳き家し、改修した

現在の小布施

当初の修景計画、完了後、15年が経過した今日、外来者なしの街に年間120万人の人々が訪れています。人々北斎館のみでなく、まちを歩き、まちの雰囲気に魅せられて、四季を通じ賑わっているのです。これは、当初の範囲（100m×120m）の**修景（環境造形美）**の効果が大きいと思います。

それは、良性のウィルスとなって、今日、まちの隅々まで感染するかのように拡散しつつあるからです。生活の場としての環境造形美こそ主役たるゆえんです。脇役である建造物、植生、疎水等の助演があってこそ創生されるものと確信を抱きつつある現在です。そして環境造形美は、人々の生活に溶け込んでエンドレスの手だてを施すことの大切さを啓示してくれたのです。（小布施まちづくりは、現在も進行形であり、小布施の公共建築（町役場庁舎、小布施栗が丘小学校、幼稚園、小布施中学校、小布施総合公園、新生病院なども私共の事務所で設計監理をしました。）また、2005年には東京理科大学の川向正人研究室が小布施町役場の中に「**東京理科大学・小布施町まちづくり研究所**」を新設し、小布施まちづくりの第二ステージがはじまりました。学術的に研究を進めるとともに、地元の小学生たちとワークショップも開催し、町民のまちづくりに対する関心を高めています。こうして、個々の**場の風景**に精霊が宿るかの如く、人々を魅了し続けるために私達は現在もこのグループで日夜精進しています。

レクチャー資料掲載は不可とする

レクチャー資料掲載は不可とする

■　保存問題委員会・長野勉強会 信州大学・梅干野准教授 講義資料④-3

保存問題委員会委員長 福田之一氏による　講義まとめ

「近現代建造物緊急重点調査（長野県）で見えたもの―その保存と活用に向けて―」

信州大学准教授 梅干野成央 先生

（配布資料 参照）

・近現代建造物の保護に向けて

・近現代緊急重点調査（長野県）の実施

近現代建造物：1945～2000 年

保護の現状

評価基準

調査の体制

調査の内容 予備調査リスト 806 件、 1 次調査 915 件、 2 次調査 30 件

・ローカル・アーキテクトの作品の把握

・1 次調査

調査リストの作成

リストの分析―竣工年に関する傾向―　：1960 以降に作品数増加

―所在地に関する傾向―　：長野市と軽井沢周辺別荘地

－設計者に関する傾向―　：著名建築家、長野県にゆかりのある建築家、地域主義。

・2 次調査

2022 年度　8 件：作家性に該当する物件主体

2023 年度 22 件：統括委員会にて評価、時代性、地域性に対する検討

2 次調査の結果

革新性：カプセルハウス（黒川紀章）,北斎館（宮本忠長）、草間邸（降幡）

地域性：長野県の自然が育んだ作品

別荘：土間の家、辻別邸、もみの木の家

長野県の文化が育んだ作品

北斎館（町並修景）、草間邸（民家再生）

長野県の環境（自然・文化）が設計者の総意に影響を与えたことを物語る作品

神長官守史料館（藤森輝信）、諏訪湖博物館（伊東豊雄）

顕著なローカルアーキテクトの作品

沖津清（善光寺雲上殿）、鈴木俊平（善勝寺本堂）

宮本忠長（長野市博物館）、滝沢健児（旧更埴市庁舎）

・迫りくる……近現代建築物の解体の危機

長野市民会館（佐藤武夫）1961→ 建替 2015（槙総合計画）

信濃美術館 （日建）　1965→ 建替 2021（宮崎浩プランツ）

旧更埴市庁舎（滝沢健児）1966→ 解体

・近現代建造物の保護に向けて

重要文化財指定：軽井沢夏の家（旧アントニン・レーモンド軽井沢別邸）

国登録有形文化財/DOCOMOMO Japan 選定建築物へ

・地域性、 個性（多様性）を見出すことが重要。

■　保存問題委員会・長野勉強会 参加者からの感想・レポート 1

長野勉強会（2024.10.18～19）の印象　　福田之一　　20241230

良かった点

1．以前行われていた保存問題委員会の合宿勉強会を長野地域会の協力で復活できたこと。

2．文化庁による近現代建造物緊急重点調査事業（令和５年度長野県・福島県）の調査対象物件を実際に調査に携わった JIA 関係者や所有者の案内で見学できたこと。
→もみの木の家(足立別邸)、土間の家、田崎美術館、善光寺雲上殿本殿

3．近現代建造物緊急重点調査を主導された信州大学梅干野成央准教授からのレクチャーで学んだこと。
＜調査結果から見えたものーその保存と活用に向けてー＞
・全体像の把握に至っていない。早急に総合調査が必要。
・活用を前提に保存すること。
・地域を拠点に活躍したローカル・アーキテクトの把握
・地域性：地域の自然が育む、地域の文化が育む、環境が設計者の創意に影響、ローカル・アーキテクト
・迫り来る…近現代建造物の解体の危機
・近現代建造物の保護に向けて：重要文化財・登録有形文化財指定、DOCOMOMO　Japan 選定建造物

印象に残った点

1．別荘建築はプライベートな施設であるがゆえに、活用を前提とした保存は難しい。
＜土間の家＞は住まいとしては使われず、近くの別荘の方々とのコミュニケーションの場として利用。
所有者は隣接した別棟を別荘としている。
＜もみの木の家＞は隣接する大企業が購入して残ってはいるが、利用されていない。各所に傷みがある。

2．篠原一男＜土間の家＞は壁面と開口部の比例関係が美しい。
土間の奥立面は高さ 5.1 尺の障子（頭をぶつける程低い）、上部明かり窓は 3.4 尺で 3 対 2 の比率

3．林雅子＜守谷邸＞の心地よさ
建物全体が軒を低く抑えてひっそりとした佇まいながら、内部は光を奥まで取り入れ快適。
和室と広縁を仕切る障子の鴨居上部は空いていて、明るく広がりのある設え。

4．小布施の街の成長は小さな一歩から＜ソトはミンナのもの、ウチはジブン達のもの＞
このコンセプトが街に魅力の場を提供し、建築家宮本忠長が街に潜んでいた独自性を引き出すことで小布施ならでは街づくりを牽引した。

日の出前に善光寺お朝事へ

篠原一男の壁面分割

守屋邸和室鴨居

成長する小布施

保存問題委員会 2024 長野勉強会レポート

新潟地域会　井口哲一

□開催日：2024 年 10 月 18 日、19 日の二日間　　＊18 日のみの参加

□勉強会概要：保存または活用されている近現代建築物の見学を通して、
その方法や建物の現状を知る。

□見学先

① もみの木の家（足立別邸）／設計：アントニン・レーモンド
② 土間の家／設計：篠原一男
③ 田崎美術館／設計：原広司

□感想

この度の勉強会では、非公開となっている「もみの木の家」「土間の家」を見学できるという、大変貴重な機会であった。準備頂いた長野地域会・下崎さん、保存問題委員の皆様に感謝しております。

「もみの木の家」では、アントニン・レーモンド設計特有の簡素な空間、建物の建ち方からは、まさに“自然との一体感”を、角度がついた平面計画からは設計意図を強く感じることができました。細部の納まりなど隅々までじっくりと見ることができ、臨場感を味わうことができました。

また、民間企業（ミネベア株式会社）が修復・保存されていることを初めて知りました。建物の価値を認識され、後世へ繋いでいこうとする姿勢に感銘を受けました。

土間を設計に採用することが多い私にとっては、「土間の家」は以前から一度は見てみたいと思っていた作品。大変嬉しい機会となりました。

築 60 年を超えた「個人宅」を見学することができたわけですが、価値を評価する人、そして愛する人がいることで、今も修繕・活用され、その建物が生き続ける、ということを改めて実感できた勉強会・見学会でありました。

■　保存問題委員会・長野勉強会 参加者からの感想・レポート 2

JIA 保存問題委員会　2024 年長野勉強会レポート　田村克己

・はじめに
１０月１８日からの一泊二日の勉強会は委員会加入後初の勉強会となり、天候にも恵まれて、胸躍るエキサイティングな勉強会でした。企画、案内、詳細な資料作成を担当してくださった、下崎さん、池森さん、ご案内していただいた方々に感謝します。また、宿では車座での座談会に参加させていただき、各自の建築談義にもふれて楽しく、また新鮮な一時でした。このような機会は中々少なく、福田委員長はじめ委員の皆様に感謝します。

・もみの木の家
林に囲まれ、なだらかな斜面の高台部分に建つ平屋建て住居は、本来の地盤を活かし、布基礎ではなく玉石、沓石を利用することにより、床下の通風を確保するとともに、土地へのいたわりを感じる。湿度が高い土地柄にもよると思うが「出来るだけ軽くつくる」日本の木造建築の原点的な一つの手法を改めて観たようだった。また、丸太の小屋組みを化粧として現した継手や仕口にも興味をそそられた。

・土間の家
開放的な玄関と連続した土間が印象的であった。篠原一男さんの木造住宅といえば、正方形に方形屋根のイメージで、どちらかといえばシャープな形態かと想像していたが、切妻屋根にむくりがあったので、ある意味新鮮であった。平側に開口部を集中させて、妻側は開口を少なくしてシンプルな壁を強調させ、屋根のラインとの調和を狙ったのかな？などと勝手に思いめぐらせてしまった。

・善光寺雲上殿本殿
重量感と軽快さが組み合わされて、均整あるプロポーションとした設計者と職人の力量に敬意を表するとともに、近現代建造物緊急調査の調査員でもある勝山さんのご案内に感謝します。塔部はかなりトップヘビーかと思いますが、構造的にもかなりの試行錯誤の賜物と思います。また、エレベーターがあることに驚いた。最上階まで上がると、建立貢献者の方々のお仏壇があり、天井には最上部へ上るためのハッチがある。いつか登ってみたい。

・守谷邸
高さを低く抑え、水平線を強調した RC 打ち放しの道路側外観は、開口部は控えめで周囲の建物とは一線を画す。中庭に面した広い開口部と天窓が、柔らかな光を室内に注いでいる。外観とは反対に室内はスライドドアを多用し、開放的でフレキシブルに空間を間仕切ることが出来るようになっている。居間入口の透明なテンパライトドアには疑問を感じたが、玄関への採光確保のためか？玄関から居間に至る解放感を演出するためなのかは不明であった。

・守谷第一ビルディング
建物本体を道路から後退させて、道路側には外部空間の延長として、奥行のある門型の独立した雨宿り場を設けることにより、建物本体との間に開放的な空間が生まれて催事場所となっている。また、適度な日影は夏季の休息場所にもなっていると思われる。

・小布施修景事業レクチャー
西澤さんから修景事業計画から完成までの貴重なお話をいただく。

・北斎館
北斎晩年の集大成ともいえる力作が多く展示されている。細身で丁寧な木部の設えに感動。

・田崎美術館
原広司さんの美術館第一作である。建物外壁面の透明ガラスに囲まれた中庭は、屋内床とのレベル差がほとんどなく、中庭と屋内とに一体感を醸し出している。主催者側から使用上の問題点等指摘もあったが、モチーフを立体化して建築に取り込む構成力、視覚的ボリューム感覚は、まだ若きチャレンジャーながらも、エネルギーとパワーを感じた力作である。また、シンボルツリーを活かした中庭の設え、佇まいも魅力的であった。

以上。

JIA 関東甲信越支部・保存問題委員会　長野勉強会（2024.10.18～19）レポート

長野地域会 下崎明久

勉強会の趣旨

- 2023･24 年度（令和 4･5 年度）にかけて文化庁の「近現代建造物緊急重点調査」が長野県で実施された。
- これは、我が国の近現代建造物が、その優れた意匠や高い技術などにより国際的に高い評価を受けてはいるものの文化財としての保存措置などがほとんど講じられていないことから、これらの適切な保護を図るため、緊急かつ重点的な調査が実施されたものである。
- 保存問題委員会では、２次調査対象となった建築物３０件のうち見学許可を得られた６件と参考建築１件について、JIA 長野地域会の調査報告者による案内により見学会を実施した。
- 調査を主導した信州大学・梅干野准教授によるレクチャーを受け、その意義や長野調査における特徴点などを学んだ。

勉強会スケジュール及び見学先

◇ 2024 年（令和６年）10 月 18 日（金）～19 日（土）
- 18 日：①もみの木の家→②土間の家→③田崎美術館→④信大・梅干野准教授レクチャー
- 19 日：⑤善光寺雲上殿本殿→⑥守谷邸→⑦守谷第一ビルヂング→⑧小布施修景事業（北斎館等）

見学・講演で印象に残った点

① もみの木の家（軽井沢町）　設計：アントニン・レーモンド
- 軽井沢の気候や敷地特性をよく理解した設計で、レーモンドの別荘建築の特徴がよく出ていると感じた。
- 丸太使いの架構が、懐かしいような、また却って斬新な雰囲気を醸している。
- 快く見学の許可を頂き案内頂いたミネベアミツミ㈱の齊藤様に感謝申し上げます。

② 土間の家（御代田町）　設計：篠原一男
- 長野などの寒冷地では南面性を重視するのが一般的だが、土間空間を北側へ設けている点が印象的。
- 敷地の周囲環境が芸術家の集まりによるコミュニティの自治組織で成り立っていることも驚きであった。
- 明け方まで、大西・大嶽両氏とこの建築について議論できたことが楽しい時間であった。

③ 田崎美術館（軽井沢町）　設計：原広司
- 学生の頃に訪れて以来 30 年ぶりくらいの見学で、その頃とは別の印象を持つことができた。
- 自然光にて絵画を鑑賞することを意図していることなど、改めて知ることができた。
- 複雑な屋根形状であるが雨仕舞や寒冷地に対応できていて、思ったより経年劣化の少なさが印象的。

④ 信大・梅干野先生レクチャー
- 近現代調査の趣旨や長野調査での特徴点（ローカルアーキテクト、革新性、地域性）等、要点を絞って教えて頂きわかりやすかった。

⑤ 善光寺雲上殿本殿（長野市）　設計：沖津清
- 初めて見学した。RC や鉄骨を駆使して木造表現をしていることが色んな意味で印象的だった。

⑥ 守谷邸（長野市）　設計：林雅子
- 高さがとても低く抑えられた平屋の平面が延び延びと広がる気持ちの良い構成だと思った。
- 天井の変化や、各間取りの仕切り方が林雅子らしさを表していると感じた。

⑦ 守谷第一ビルヂング（長野市）　設計：林雅子
- 増築を重ねて、建築当初の門構えの特徴的な構成がわかりづらくなってしまっている感じがする。

⑧ 小布施修景計画（小布施町）　設計：宮本忠長
- 宮本事務所の西澤さんにレクチャーをして頂き、改めて大変勉強になった。
- 「ソトはミンナのもの、ウチはジブンたちのもの」のコンセプトは今後も大事にしていきたいと思った。

■　保存問題委員会・長野勉強会 参加者からの感想・レポート 3

長野勉強会に参加して（2024/10/18～10/19）

茨城地域会　本澤　幸一

今回はじめて保存問題委員会の勉強会に参加させて頂きました。勉強会実施において　長野地域会の方々にはスケジュールの立案及び見学先の手配など大変お世話になりました。見学時期が 10 月だったのに 19 日の気温が 27℃。びっくりでした。私なりの感想を述べさせて頂きます。

☆もみの木の家（アントニン・レーモンド/1966）

ちょっと変わった形（間取）の建物でした。小屋組みに特徴があって内部仕上や家具と相まってここちよい空間のある建物。が感想です。当時、冬は寒かったのでは。所有している会社が修復しながら維持しているとのことですが、これからも大切にして頂きたい建物です。日光の元大使館別荘と同じで自然との一体感が素晴らしい建物です。

☆土間の家（篠原一男/1963）

昭和 30 年代の田舎の建物には"土間"が必ずあったような。私の自宅も小さい頃は玄関が土間だった。なつかしい雰囲気を持った建物です。土間があって畳の間。そんな家で季節を感じて過ごせたら楽しいのでは。

☆田崎美術館（原広司/1986）

建設当時建築雑誌に紹介されていたのを覚えている。"原広司"って感じのデザインの建物として記憶している。だいぶ　くたびれてしまった建物でしたが見学できたのはよかった。

☆善光寺雲上殿本殿（沖津清/1949）

終戦直後にこのような巨大で複雑な建物が建てられたのは驚きです。当時、あの屋根の部分はどのように作ったのだろう。善光寺創建について　描かれた絵の解説が良かった。

☆清水家旅館（宿泊先）

なんか不思議で複雑な空間の旅館でした。もう一度　のんびり泊まりたいです。善光寺の近くで観光には最適な場所でした。

長野県には近現代の素晴らしい建築がたくさんあるのには驚きです。これは地域の方々の建築に対する現れではないか。関心するばかりです。